

トマス・カーライルと明治の文芸思潮

——『英雄崇拜論』の受容を中心に——

川戸道昭

明治の世に圧倒的な人気を博しながら今日顧みられなくなってしまった文芸作品は少なくない。例えば、ここに取り上げるトマス・カーライルの『英雄崇拜論』などはその典型ではないかと思う。高山樗牛の『時代管見』(明治三十二年刊)によれば、『英雄崇拜論』は明治二十年代から三十年代にかけてゲーテやバイロンなどの作品と並んで若者の机上を飾る青春必読の書物であったということだが、今日ではそれを繙いてみようという若者は稀である。なぜ『英雄崇拜論』は読まれなくなってしまったのか、松田穰編の『比較文学辞典』を見ると、その理由として、本書の英雄重視の思想が今日主流の民主主義の思想と入れあわなくなつたためということがあげられている。しかし、それだけだろうか。今日『英雄崇拜論』が読まれなくなつたのは、現在の民主主義の思想と入れあわなくなつたため、裏を返せば、明治の世にそれがもてはやされたのは、「世界の歴史は偉人の伝記にすぎない」とする英雄中心の歴史観が富国強兵や殖産興業を合い言葉に民衆の士気が鼓舞されていった時代の好尚に投じたため、ということと説明は足りるのだろうか。確かにそれは一面の真実をついた解釈には違いないが、そのことをもって、明治の思想界、キリスト教界を支えた人々の心の糧とも目されていた書物の流行の原因とするのははなはだ不十分であるように思われる。『英雄崇拜論』は単なる偉人礼讃の書物とは違う。その流行は当時の人々の燃えるような信仰心、求道心、向上心と深く関わっていた。ある人はそこに自らの人格と独立心とを養う方途を見だし、またある人は神の道へと誘う福音を聞いた。時にそれは理想主義の文学を提唱するための拠り所となり、また時には世の弊風を正すための典拠となった。明治の知識人たちの思想や人格の形成にかくも深く関わっていた書物の受容経過を検証するのに、当今流行の安易な常識論的解釈をもつてしたのでは、その

導き出される結論の限界は自ずから見えている。カーライル受容の根底に潜む核心部分に迫りたいと思うならば、まずは明治の文芸思潮全体を見通せる幅広い視野と、そこに流れるダイナミックな精神の動きを読み取るだけの鋭敏な観察力とが、最低限必要とされるのである。

1

カーライルの『英雄崇拜論』は、一八四〇年に彼がロンドンの聴衆を前に行った講演をもとにして、翌一八四一年に編集・出版されたものであるが、標題からも読み取れる通り、そこに展開されているのは、徹底した英雄中心の歴史観である。「世界の歴史は、根本的には、この世において力を尽くした偉大な人間の歴史である」と、開巻冒頭の「第一講」から、およそ民主の思想と容れあわぬ考え方が、われわれの注意を奪う。しかし、このような歴史観に貫かれた本書ではあるが、読み進むにしたがって、通常の偉人・傑士の伝記を読んでいる場合とは、よほど違った印象を受けるのはなぜなのか。それは、一つには、彼の言う「英雄」が、世間一般に考えられている英雄と大きく異なっているためである。カーライルによれば、「英雄」を「英雄」たらしめる第一の特色は、「誠実さ(sincerity)」にあるという。それも単なるありきたりの「誠実さ」ではなく、「深く、偉大で、純粹な誠実さ」であり、「英雄」本人が「意識もしていない種類のもの」だ⁽⁵⁾という。明治の人々はそのような「誠実さ」を「至誠」と呼んだ。

それでは「至誠の士」たる「英雄」の具体例としてカーライルはどのような人物を想定していたのか。その例として、彼は、北欧神話に登場するオウディン、イスラム教祖のマホメット、宗教改革の闘士ルター、さらには、ダンテ、シェイクスピア、クロムウェルなどの名前を挙げている。これらの「英雄」の性格と、その歴史上果たした役割とが、時代の流れに即して「神」「予言者」「詩人」「牧師」「文人」「帝王」の六項に分類され、説き進められていくというのが『英雄崇拜論』一書の趣向である。ここに名前の挙げられた「英雄」の顔ぶれを見ただけで、本書が世間一般に流布する偉人論とはまったく趣を異にした書物であることが理解できると思うが、それらの偉人をめぐる彼の論理がまた、通常の偉人論とは違った一種独特の精神論的「英雄論」で

あつた。例えば、「第五講」の「文人としての英雄」の項に登場するサミュエル・ジョンソンに関するカーライルの所論は次のようなものである。

《「ジョンソンは」^{これすなわち}是則全英洲中、最貴最高の大精神、……真人の気骨なり、一個豪壮不屈なる大精神たるに妨げなき也。人は常にオックスフォールドに於ける履^くの話^{うが}を記するならむ。粗豪、浚面、形容枯悴せる大学の給費生^{サーピトル}、其穢れたる弊履^{うが}を穿ちて、寒天何物と傲然として濶歩す、時に一慈善家にしてオックスフォールドの第二等生^{ひそ}、私かに一足の新靴を求めて之を彼れの戸内に置く、而るに憔悴の給費生^{サーピトル}、そも何の所思有りてか、取て之を朦眼に眺め——直ちに窓外に放擲せりと云ふ……此靴^{この}を投ぜることジョンソン一生の標本と云ふ可し。嗚呼一個独創の人——古人に由らず、他人に真似ず、世間の助を乞はずして、以て独立特行す、豈毅然たる好男兒ならずや、請ふ吾人をして必ず先づ自家の礎上に立たらしめよ、吾人は吾人の力に由て先づ其得たる靴を用ゐん、霜露の表に有るも可也、泥濘の裡に有るも可也、然れども唯当^{まさ}に正直なる可し——「自然」が吾人に与へし所の、実体の上に於て、將た本質の上に於て吾が双脚を立たしめよ、若夫れ^{もし}然らずして「自然」が他人に与へし者や若くは他人の類似の上は是断じて立つべきに非ざる也!」(住谷天来訳『英雄崇拜論』より)

このようにカーライルはジョンソンの独立独行の精神を言葉をかきわめて褒めつくす。そしてそこに、懷疑の暗雲に覆われた十八世紀英国社会における、「予言者 (prophet)」としてのジョンソンの姿を見出だすのである。ジョンソンが「予言者」たる役割を担えたのも、彼が「真面目さ (sincerity)」を具えていたため、つまり、「自然の核心からものを言うところがあつたため」である⁽⁷⁾と、カーライルは力説する。サミュエル・ジョンソンといえは、明治時代、江湖にその名を知られた屈指の流行作家であつた。今では大学の英文科においてすらめつたに取り上げられることのない彼の伝記や逸話が、明治の世にどうしてそれほどまでに巷間に流布したのか、この疑問に対し、われわれはここに一つの解答を見出だす。それは、要するに、彼の言行が「独立」「立志」

を願う明治の人々を教え導く手本として最適のものと受けとめられたためである。とりわけ、ジョンソンという人物は、自らの行動をもつて範を示したことによりその名を知られた人物である。上の引用文に見られる、オックスフォードの学窓から友の贈った靴を放り投げてしまう話にしても、ジョンソン自らが身をもつて体験したことの中から引き出されてきた訓話であつて、その不撓不屈の精神にあふれるジョンソンの伝記や逸話は、孔子や孟子の教訓に馴れ親しんできた人々が手本とするのに最適の「泰西訓話」であつた。そして、そのような行動の鑑としてのジョンソン像を広めるのに、圧倒的な影響力をもつた書物、それこそがトマス・カーライルの『英雄崇拜論』であつたのである。

2

カーライルの『英雄崇拜論』は、このように、人々に真の誠と自主独立の精神を説いた作品として、特に、英語を勉強する学生の間で大きな流行となつていった。儒学の伝統を色濃くとどめた当時の英語教育においては、従来の四書・五経に取つて代わる精神涵養の書物として、『英雄崇拜論』のような、いわば人生指南の書物が広く用いられていったのである。

一方、それとは別に、もう一つ見逃すことのできない重要な流れが、日本に『英雄崇拜論』が紹介され始める当初から存在していた。それは、植村正久や巖本善治らを中心としたキリスト教徒による受容の流れである。彼らの努力なしには、カーライルの思想は日本に本格的に根を下ろすこともなく、一部の偉人崇拜者の血をたぎらせただけの思想として終わつていただろう。それほど、植村らキリスト教徒が果たした役割には大きなものがあつた。

ディケンズやサツカレーなど同時代の文豪大家の紹介もいまだまともになされていなかった明治十四年二月、若きキリスト教徒の団体である東京青年会が発行した『六合雑誌』の五号には、早くも「カーライル氏略伝」という一頁半ほどの小文が掲載される。そして同じ雑誌の第十二号には、「詩論一班」という標題の下に、カーライルの思想を援用した新詩歌作興のための論理が展開される。署名こそ付されていないが、両文ともに、初期のキリスト教界の功労者植村正久の手になるものであつた。植村のこれらの文が契機となつて、以後、カーライルの思想は『女学雑誌』や『日本評論』等、キリスト教系の雑誌に引きも切らず紹

介されていく。なかでも、熱心なカーライル信奉者は、『女学雑誌』の編集者、巖本善治で、彼は折りを見ては「今の高等女学生は須らく此の英雄豪傑を愛すべし、別言するに尤も危険多く、尤も不幸多く、尤も寧日少なく、尤も短命なる職業に在る偉丈夫を愛せよ」といった⁽⁸⁾。

巖本や植村らの努力が実つて、明治二十年代の半ばともなると、カーライルの思想は次第にキリスト教に理解を示す知識人の間に根を下ろし、そこから熱心な英雄信仰者が生まれていく。カーライルの眞の理解者たりうるか否かは、ひとえにキリスト教の良き理解者か否かにかかっている。そういつても決して誇張にはならないほど、若きキリスト教徒の中には熱心なカーライル崇拜者が存在した。彼らが、カーライルの操る言葉の中にどのような福音を聞いていたのか、その典型的ともいえる受け止め方を、国木田独歩の『欺かざるの記』から引用してみよう。

《英雄なくんば吾人生を失望す、吾今にして始めてカーライルが英雄崇拜の本旨を知りぬ。然り此の世界若し彼のクリストなく、ミルトンなくルーテルなく其他「シンセリテイ」以て茲に立ち人間を教へ、人類を導き、人類を支配せざりしならば吾、人生を失望す。吾は英雄の雄魂靈心を通じて人生の希望を認む。英雄なくんば世は空なり。愚人の衆合たるに過ぎず。獸類の群たるに過ぎず。

英雄に因りて「シンセリテイ」を知り。「シンセリテイ」以て神を望み、世界の神聖を信ず。信仰以て起る、希望由りて生ず。

而して吾自ら英雄たる能はずんば人性程怪しくして恐ろしき者はあらず。

英雄たる可きは義務なり。……

『英雄たるは義務なり。』之れ吾が信仰の粹也⁽⁹⁾』

これが国木田一個人の偏った「英雄」解釈であると思つてはならない。明治の若者、特に、キリスト教に心を寄せる若者たち

は、カーライルの説く「英雄」に対し多かれ少なかれ同様な反応を示したのである。そのことを裏づける資料として、もう一例、今度は英文学者斎藤勇の回想から文章を引いてみよう。明治三十年代の半ば、当時福島中学の四年生であった斎藤は、日頃敬愛する英語の教師から『英雄崇拜論』を読むように勧められ、わざわざ東京の丸善から原書を取り寄せて、その講読にとりかかる。カーライルの言説は彼の心にもまた、激しい情熱の炎をともした。

《到着した On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History は、チャップマン・アンド・ホール出版、薄青い紙表紙の小冊子である。前記の詩集とこの講演集とを手にして、中学生である私はいかに得意であったらう。……第二講マホメット論の中で、至誠こそ英雄の特徴であるといふ説は、少年の胸に燃えるやうな情熱をともした。

I should say sincerity, a deep great, genuine sincerity, is the first characteristic of all men in any way heroic.

といふ一節を、吾妻山にうすづく夕日が西の空を赤く染める頃、ひとり信夫山麓の校庭に立って、幾度誦んじたか知れない。今、目の前にある、その時の本を見ると、その一節と次の一節とは、細く又は太く、無茶苦茶に底線が引いてある。それは少年時代の単純な感激のしるしである。⁽¹⁰⁾》

このように『英雄崇拜論』流行の背景には、明治人の烈々たる求道心、とくにキリスト者のそれがあつたわけで、アレキサンダー大王やナポレオンらの伝記の流行を支えていた世俗的な偉人・英雄に対する憧憬、立身出世への願望などとはだいぶ趣を異にするものがあつた。同じ英雄とはいっても、カーライルの説く英雄はもっと宗教的な道德臭のあるものだった。さもあらずば、その論が植村、巖本、国木田といった当代きつてのキリスト者の心の飢えを満たす糧となるはずはなかった。カーライルは、サミュエル・ジョンソンのことを、「ジョンソンは人々にとって予言者であつた。彼らに福音を説いた」といつて彼の果たした道德上の役割を称えているが、われわれはそういうカーライルその人自身が国民に「福音を説く人であつた」という事実を見逃すわ

けにはいかない。明治の識者には、この「一大伝道者」たるカーライルの本当の姿が、はつきりと見て取れていたのである。

3

日本に初めてトマス・カーライルの詩論を紹介した人物が明治キリスト教界の功労者・植村正久であったことは前にも述べたが、そのことで注目されるのは、彼が単にカーライルの思想を日本に根づかせようと試みただけではなく、その思想を日本の詩歌・小説の改良につなげていこうとした点である。植村は、明治十四年、東京青年会が発行する『六合雑誌』に「詩論一斑」という小文を掲げ、日本の文学改良の必要を次のように訴えている。

《余輩ハ、世ノ学士才人ガ、汎ク西洋ノ諸家ノ名詩傑作ヲ熟読シ、彼我ノ得失長短ヲ比較シ、以テ旧来本邦ノ詩学ニ頭ハレタル陋習欠典ヲ洗滌シ、新タニ純乎タル日本ノ詩ヲ興サレンコトヲ望ム切ナリ》⁽¹²⁾

つまり、植村は西洋の名詩を抛り所に、日本に新たな詩歌を興そうという呼びかけをおこなっているのだが、彼がそこで世の「学士才人」に問い質そうとしたのは、詩の本来の目的とは何かという問題である。植村によれば、その目的とは、人性に賦与された高尚なる才能・情感により、人心を鼓舞し、心が物欲に制圧されるのを救うことではないかという。同時に、至大なる真理を美しく描き出し、その士気を持続させていくことではないかと述べる。そうして彼が引き合いに出すのはカーライルの詩歌論であった。曰く、「カアライル氏ガ、古ノ歌人ハ天地ノ会議ニ与カリ、神明ノ友侶、人類ノ最モ善キ興益者、万世ノ師傳ナリト云ヘルモ、即チ此意ナランカ」と。詩人が人類の最も善き「興益者」にして「万世ノ師傳」であることは『英雄崇拜論』一書に繰り返し力説されているところであり、新たに「純乎」たる日本の詩歌を興さんとする植村の脳裡にも、カーライルらの著書を通して学んだ西洋の詩人の理想の姿が描かれていたことは疑いを容れない。その理想の姿とは、もちろん、キリスト教徒にとつての理想の姿であり、頂点には、「詩人としての英雄」、ダンテの存在が屹立していた。

植村がこの詩論を発表したのは、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三名が『新体詩抄』を発表し、空前の新体詩ブームを

巻き起こす一年前、すなわち明治十四年九月のことであった。植村の詩歌改良運動は、外山や井上らの新体詩歌実作の試みに比べれば、世間に与えた影響はけっして大きなものとはいえない。しかし、外山や井上らの試みがどちらかというと大学に籍を置く人々の「道楽」の域にとどまり、彼らの詩集はこの一篇で途絶えてしまったのとは対照的に、植村の方は、その後も『日本評論』などキリスト教系の雑誌を中心に、カーライル、ユゴー、トルストイといった人道主義的な色彩の濃い作家や作品を次々に紹介し、一般読者や社会の啓蒙に努めていった。やがて、そこには巖本善治など同様な理想を掲げる知識人も現われて、キリスト教徒を中心とする理想主義の文学運動は明治文学史上の一つの潮流を形成するまでに勢力を拡張していった。

この植村らの文学運動は、これまでほとんど顧みられることはなかったが、明治文学の流れの上から見ると、坪内逍遙や二葉亭四迷が提唱した写実主義文学の対極に位置づけることができるきわめて重要な文学運動であった。『英雄崇拜論』はその重要な文学運動の理論上の一つの拠り所であったというわけである。

先にも述べたとおり、『英雄崇拜論』に説かれている文学論の本質は、キリスト教の観点に立った理想論的文学論である。「牧師としての英雄」であるルターやノックスを論じる場合はもちろんのこと、詩人あるいは文人としての「英雄」であるダンテやシェイクスピア、ジョンソンなどの文学者を語る際の言葉の端々にも、キリスト教的道徳観が色濃くにじんんでいる。そのような作品を拠り所とする文学運動である以上、植村や巖本らの運動というのは、最終的にはキリスト教の教義を広めることを目的とする運動であり、それが当時の一般文学者の反発を招く原因となったことは想像に難くない。とくに、写実主義の文学を信奉する文学者の中にはそれを黙って見過ごすことができずに正面きって文学論争を挑む者もあった。そうした「理想（＝キリスト教的文学論）」と「反理想（＝写実主義的文学論）」の対立は、一部とはいえかなり白熱した議論を生み、例の有名な坪内逍遙と森□外の間で戦わされる「没理想論争」の前哨戦的な様相を呈していったという一面を考慮すると、この理想主義の文学運動が辿った一連の経過を検証することの意味は決して些少ではないように思われる。そこには、日本の近代文学成立期の文学者・知識人たちが経験した精神上的葛藤が圧縮されて投影されている。われわれが『英雄崇拜論』の受容の経過を検証するにあたって、まず明らかにしなければならないのは、明治の文学者・知識人たちが辿ったそのような精神上的軌跡である。

『明治初期翻訳文学の研究』の著者柳田泉によれば、写実主義とは「描写の巧を第一」とし、理想主義は「作者の天才が主」となるものということであるが、植村や巖本らの提唱する理想主義の文学にカーライルの『英雄崇拜論』がいかに適合するものであったか、それは巖本の「カーライルは、多くの人に勝れて至て道徳を重んじ深く英雄を崇拜した学者なれば、其眼識を以て見れば蓋し真正の詩人こそ最も高き道徳家、尤も大ひなる英雄にてありしならん」という評によく現れている。⁽¹⁴⁾「真正の詩人こそ最も高き道徳家」、つまり「真正」の文学とは「最も高き道徳」を教える文学のことだという。この、巖本がカーライルのものを受け止める文学観は、そのまま巖本の懐く理想主義の文学観の中枢を成すものでもあった。明治二十二年八月、巖本は、自らの編集・発行する『女学雑誌』の社説に独自の文学論を掲げ、世の博識に質している。それを題して「小説論略」という。その核心をなす文学観は次のような理想主義的文学観であった。

《何如なる小説が最良にして、何如なる小説家が最も良きと問ふものあらんには、……現社会進化の大法により、人類終極の運命により、人情至高の喜樂によりて之を考ふれば、彼の意匠清潔、道念純高なるの小説、小説家を以て、読まるゝこと尤も久しく、味わるゝこと尤も深く、益すること尤も大きく、化する所尤も高しとなし、之を以て其最良なるものと為さざる可らず。》⁽¹⁵⁾

いかに明治の世とはいえ、このような道徳論的文学論が何ら批判も浴びずに、そのまま見過ごされるはずはない。最も厳しい批判の声は、外でもない当の『女学雑誌』の常連寄稿者の中から起こった。巖本の論文が発表されてひと月も経たぬ九月の半ば、『小説論略』⁽¹⁶⁾「質疑」と題する一文が『女学雑誌』誌上に掲載される。執筆者の名は、松羅堂主人。もちろん、これは仮の名で、実際これを物したのは当時売り出し中の内田不知庵（後の魯庵）であった。魯庵にとつて最も承服し難かったのは、巖本が小説に「理想派」、「実際派」の区別はないとしている点である。「勸善懲惡に偏するとも」、「人情實際を専一とするも」、「心理的を第

一とするも」、皆小説であることに変わりはないという巖本の主張に、「記者は真実にリアルとアイデアルの区別を知らざるや」と強く反発する。逍遙を師と仰ぎ、二葉亭を友とし、写実主義の文学には一方ならぬ思い入れのあった魯庵である。敬愛する師匠や友人の傑作をそこらの戯作と同列に並べられたとあつては黙っていられない。しからば「小説とは何如なるものぞ」、「リアルは何故に記者の嫌ふ処ぞ」、「最高の小説は今の世になきや」と、矢継ぎ早に『女学雑誌』の編集人に質問を浴びせていった。小説は言うまでもなく経典でも修身書でもない。「もし小説を読むに道徳書と同様に考へ、神と云ふ字、信心と云ふ句がなしとて是は最高の意味純潔の結構にあらずとせば恐らく及第するの小説なかるべし」と魯庵は巖本の文学観に強く反発を示したのである。

しかし、魯庵は一つ重要なことを忘れていた。巖本という人物は作家を本業とする人物ではない。明治女学校で教鞭を取る教育者である。しかも、校長という要職にあつた人物である。そのような立場にある者からすれば、小説の「リアル」、「アイデアル」の別などはあまり取り立てて問題にすべき事柄でもなかつた。重要なのはそういうことより内容の方である。もしも教育上好ましからざる小説が市場に出回るならば自分にははっきりと勧告する、読むべからずと。仮にこれを咎めるような者があつても、それはあるいは文学者であるかもしれないが、決して教育者ではないのである。巖本はそう明言して、次のように結論づける。小説において純然たる理想派も、純然たる実際派もない、「若し必らず之れありと云はゞ寧しろたゞ理想的の一ありとこそ云はめ」と。最初からこの論争は噛み合わない⁽¹⁷⁾と見て取つていたので、巖本は、魯庵の質問に即答を避けていた。しかし、「『小説論略』筆者に再問す」という一文が再び魯庵の側から寄せられるに及んで、彼はこのような揺るぎのない回答を示したのであつた。⁽¹⁸⁾

かくして魯庵の攻撃は肩すかしに終わった。しかし、この問題は一度は文学者同志の間で徹底的に論じあわなければ収まりがつかない問題であつた。魯庵が望んだ「リアル」、「アイデアル」の論争は、時と場所を移して、皮肉にも今度は「リアル」を信奉する一派が「アイデアル」を奉ずる一派から攻撃されるという形で再現される。坪内逍遙の唱える「没理想」の主張に森口外が食つてかかつたいわゆる「没理想論争」がそれである。その子細については文学史上に詳しいので、ここでは繰り返さない。ただ一つ確認しておきたいのは、カーライル受容の変遷もこの写実を是とするか、理想を取るかという大きな文学史上の流れと

決して無縁でなかったということである。日本主義、西欧主義という要素も加わった大きな流れの中で、カーライルの作品も時に推され、また時に駁されという変転を辿っていく運命にあったのである。

5

魯庵は「意匠清潔、道念純高なる」小説を最良とする巖本の道徳的文学観には否定的であった。しかし、巖本の文学観の拠り所となった『英雄崇拜論』に対しても同様に批判的な立場をとっていたわけではない。彼は、巖本とはまた別の点で、『英雄崇拜論』から大いに学ぶところがあつた。そしてその学んだ内容を自らの文学論に積極的に反映させていったという限りにおいて、巖本も魯庵もまったく同一の立場に立っていたと見ることができるのである。では、魯庵はカーライルからなにを学んだのかということだが、それは、一言でいうならば、文明・文芸批評の方法である。内村鑑三も指摘するように、カーライルは、眼前の弊を批判するのに過去と外国の事例をもつてした。それが彼常套の批評手段であつた（内村「カーライルを学ぶの利と害」⁽¹⁹⁾参照）。魯庵がカーライルから学んだのはこの文明・文芸批評上の手法である。例を一つ、魯庵の『ラセラス伝』の作者」と題する論説から引いてみよう。

《サミュエル、ジョンソン何人ぞ。オックスフォルドの大学に弊靴を引摺りし貧乏書生にして人の恵し靴を窓外に放擲せしだけの男なりき。而して不屈不撓、飽くまでも衆人の上に超然として流俗の奴隸とならず却て時世を指導するをもて其任となし、小にしてはグラップ街の猥陋なる習俗を矯正し、大にしては十八世紀を蒙蔽せる懷疑の暗雲を掃蕩したりき。

“Clear your mind of Cant!”——是れジョンソンが格言にて浮華と虚栄に充てる当世に向て教へぬ。『ラセラス伝』も“Vanity of Human Wishes”も『ランブラア』に『アイドラー』に侃々せし諸篇も皆此信仰なき軽薄時代を諷誡せしにあらざるはなし。渠は実に一大伝道者なり》⁽²⁰⁾

これを先に掲げた『英雄崇拜論』の中のジョンソン論と比べてみれば、魯庵の懐く理想的ジョンソン像の因つて来たるところが判然とするだろう。ジョンソンを偉人・英雄、「一大伝道者」と見なす考え方だけではない、そうした考えを伝える論調までもがカーライルの口吻をそのままとどめたものとなっている。カーライルにとって、ジョンソンは人々に「福音」を説く「予言者」であった。懐疑主義の暗雲漂う十八世紀の世の中にあつて、「汝の心より偽善を除け！(Clear your mind of Cant)」という福音を伝える予言者であつた。このようなカーライルの解釈に倣つて、魯庵もジョンソンを、浮華と虚栄に満ちた世の中において虚偽を捨て正道を歩めと教えた「一大伝道者」と受け止めていったのである。

しかし、カーライルの説をそのまま踏襲しているからといって、魯庵を単なる模倣者と決めつけてはならない。魯庵には魯庵の狙いが別にあつたのである。その狙いを一言でいうならば、カーライルの手法に倣つて、当時の日本の文壇社会に蔓延する弊風を正すこと、これである。明治二十七年七月、彼は東京の民友社から『ジョンソン』と題する人物評伝を出版するが、その出版の狙いの一つがそうした社会の弊風打破にあつたことは明白である。「“Clear your mind of Cant!”——渠〔ジョンソン〕が生涯に絶叫せしものは唯だ此声なりき。之を常識を教ゆる説教なりとて斥くるものは十八世紀が実に此説教すらも要せし時代なるを知らざるなり」。『ジョンソン』という作品は、民友社の「十二文豪」と題する内外の文人を対象とした伝記シリーズの「号外」として出版されたものである。従つて、表向きは他の作品に合わせて評伝という形が取られているが、実際は社会時評的な側面を伴う魯庵独自の作品であつた。「著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を諷刺し、ジョンソンの行実を録して暗に明治の文士を戒めんとしたる跡歴々たり、随うて、此の伝論は正統の伝論といはんよりは、寧ろ史伝を材料として物したる時論とも評すべきもの也」⁽²²⁾。一見ありふれた評伝のように見える『ジョンソン』の中に、魯庵の眞の狙いをいち早く見て取つた坪内逍遙の言葉である。

このように、魯庵が西洋の文人の「行実」に照らして当時の文壇浄化を図ろうとしていたのは誰の目にも明らかであつたが、魯庵にとって鑑とすべき西洋の文人は誰であつてもよかつたわけではない。やはりそれは「神」でもない「予言者」でもない、「文人」としての「英雄」ジョンソンでなくてはならなかつた。彼は、巖本のように文学評価の基準に「神」を持ち込むことは

しなかったが、その代わりに、文壇浄化を図る指針として「文人としての英雄」ジョンソンを持ち込んだ。巖本も魯庵もともにカーライルの思想に学び、それを自説に反映させていったという点において選ぶところはなかったのである。

6

カーライルの作品を文明社会にはびこる弊風を正す拠り所にしようと考えていたのは魯庵一人ではない。例えば、明治三十一年、『英雄論』（『英雄崇拜論』の完訳）を世に問うた土井晩翠もその一人で、土井はその序文において『英雄論』出版の意義をこう表現している。

《旧信仰既に廢れて新信仰未だ興らず、靈界嚮導の光、暗中に没して、民心其憑依するところを知らずとせば、トーマス、カーラエルの言豈に一考の価なしと曰はんや。嗚呼東海の君子国、長時の懶眠を破り世界の大道に立ちて、三十年間物質的文明の利害已に斯の如し。泰西近時の史跡に照して本邦の現状を顧みば、本書の訳述未だ必ずしも徒勞ならざるを知らん。》⁽²³⁾

「泰西近時」の事柄に照して「本邦の現状」を顧みる、要するに土井もまた『英雄崇拜論』一書をもって世の弊害を正す警世の書と見なそうとした知識人の一人であった。しかし、へ自らの弊履を穿^{うが}って冷たいぬかるみの上に立て〜という式の精神訓話^{うが}が、太平の眠りから覚めて三十年、漸く顕著となってきた西洋の物質文明の弊害を矯正する手段としてどこまで有効なものとなりえたか、その実効性に関しては疑いの目を向けるものも少なからずあった。たとえば、その代表的ともいえるのが、キリスト教などの外来思想に対抗して日本主義を唱道した高山樗牛である。彼の、『英雄崇拜論』批判は、世に小カーライルをもつて任じる無数の知識人たちに、カーライル風の文明批評がいか理に適わぬ「神秘論」的文明批評であるかを改めて示してみせた、きわめて的をえたカーライル批判であった。曰く、カーライルという批評家は、人に肉を見ずに霊を見、世に盛衰を見ずに天啓を

見た。耳と目と理性とを信じずに、聞こえぬもの、見えぬもの、理解し得ないものを真理として仰ぎ、宇宙はすべてこれ神の記号と見なした。宇宙はすべて神の記号——彼の神祕説を突き詰めればただこの一言に絞られる。しかも、その神祕論をかざすのに、天から授かった一種の厭世的性癖をもってしたので、彼の人生観はきわめて偏頗なものになった、と。そして最後に付け加えるのが、カーライルまがいの言辞を弄する文明批評家に対する、以下のような痛烈な批判である。

《世に往々小カーライルを以て自ら居るものあり。其の真摯と狂熱とは吾等是を諒す、されど其幼稚なる神祕論を移して現世の経緯策に擬せむとするに到りては、遂に其の可なるを知らざる也。あはれ詩人にして経世家の仮面を被れるもの、必ず世を毒し人を誤らむ、彼れ若し自ら仮面を被れることを覚らざらむには、人是を外より褫落せざるべからず。》⁽²⁵⁾

民衆を煽動し狂信へと誘う危険性をはらむカーライル思想の問題点を指摘したごく早い段階の批判として、この樗牛の批評は注目に値するだろう。

ところが、今手もとにある比較文学辞典をみると、高山樗牛という作家は、「明治三〇年代に、『英雄と英雄崇拜』や『衣裳哲学』(『サーター・リザータス』)の思想に共鳴し、日本の思想界にそれを鼓吹した」評論家とある。確かに、樗牛は、青春のある一時期に、カーライルを「凡上に二つなき友」としていたことがなかったわけではない。それは本人も認めている通りである。⁽²⁷⁾しかし、この文章が書かれる明治三十年代においては、決してその思想を「鼓吹」するような立場になかったことは上の文面からも容易に推察できるところだ。それにもかかわらず、このような事実と正反対の結論が導き出されるといえるのは、カーライルの受容の経過を断片的に捕えるだけで、全体の大きな流れの中で理解していない証拠であろう。樗牛の青春は、他の英学生同様、カーライルを熱読することから始まった。しかし、彼のような炯眼を備えた作家の意識や思想がいつまでも英学生の段階に止まっていることなどあるはずもない。その間に多くの書物に接し、思索にも励んだ。一方、文学界・思想界においては、新しい文学・思想を唱道する幾多の試みがなされ、丁々発止の論争が起こった。そういうことを一つ一つ経験しながら、樗牛個人も、日

本の文学・思想界全体も徐々に成長し、変貌を遂げていったのである。植村や巖本はカーライルの思想をもとに新たな理想主義の文学を奨励していった。魯庵は二人とは違ってそれを日本の文壇浄化を図るよすがとした。そして樗牛は、そうした外来思想に対抗すべく、独自の日本主義を唱えるに至った。同じカーライルの思想から出発した若者が、様々な経験や挫折を経て、独自の思想を形成していく。外来思想の受容の変遷を辿るといことはとりもなおさず、日本の知識人たちが歩んだそうした試行錯誤の変遷を辿ることである。明治の世に一大旋風を巻き起こし多くの若者の心を虜にしたカーライルの書物は、そのような日本の知識人たちが経験した精神上の軌跡を窺う上で最適の書物といえることができるのである。

〔注〕

- 1 高山林次郎「カーライル氏の英雄論の翻訳に就きて」『時代管見』（博文館、一八九九年）二八三―八四頁。
- 2 松田穰編『比較文学辞典』（東京堂出版、一九七八年）の「カーライル」の項（六七―六八頁）参照。
- 3 Thomas Carlyle, *Heroes and Hero-Worship and the Heroic in History*, AMS Press, 1969, p.182.
- 4 *Ibid.*, p.10.
- 5 *Ibid.*, p.10.
- 6 住谷天来訳『英雄崇拜論』（警醒社、一九〇〇年）二八四―八五頁。
- 7 Thomas Carlyle, *loc. cit.*, p.155.
- 8 「英雄豪傑」『女学雑誌』一六七号（女学雑誌社、一八八九年）二四八頁。ただし、本論は無署名。
- 9 国木田独歩「欺かざるの記 前篇」『定本 国木田独歩全集』第六卷（学習研究社、一九七八年増訂）三〇五頁。
- 10 斎藤勇「中学生の時丸善から買った英書二・三冊」『GAKUTO』二二年一―一号（丸善、一九三八年）一九頁。
- 11 Thomas Carlyle, *loc. cit.*, p.321. ()に引用した英文は次の通り。"Johnson was a Prophet to his people; preached a Gospel to them,..."

- 12 「詩論一斑」『六合雑誌』一二号（東京青年会、一八八一年）二九二―九四頁。
- 13 柳田泉『西洋文学の移入』（春秋社、一九七四年）二一九頁。
- 14 『女学雑誌』一六七号、二三四頁。
- 15 「小説論略」『女学雑誌』一七七号（一八八九年）三二―三三頁。
- 16 松羅堂主人『小説論略』質疑『女学雑誌』一七九号（一八八九年）九二―九七頁。
- 17 故の小説論略筆者「謹んで龍背に申す」『女学雑誌』一八二号（一八八九年）一八一頁。
- 18 松羅堂主人『小説論略』筆者に再問す『女学雑誌』一八二号（一八八九年）一七五―一八〇頁。
- 19 内村鑑三「カーライルを学ぶの利と害」『宗教と文学』（警醒社、一九〇一年三版）一―四一頁。本書の表題は初版（一八九八年発行）においては『月曜講演』であった。
- 20 内田魯庵『ラセラス』伝の作者『国民之友』二二四号（民友社、一八九四年）二六頁。
- 21 内田貢『ジョンソン』（民友社、一八九四年）一九八頁。
- 22 坪内雄蔵「ジョンソン」『文学その折々』（春陽堂、一八九六年）六五七頁。これは最初『早稲田文学』に掲載されたもの。同誌六九号、一八九四年、七七頁。
- 23 土井晩翠「訳英雄論序」『英雄論』（春陽堂、一八九八年）。
- 24 高山林次郎「カーライル氏の英雄論の翻訳に就きて」『時代管見』（博文館、一八九九年）二八七頁。
- 25 高山、前掲書、二九二―九三頁。
- 26 松田穰編『比較文学辞典』（東京堂出版、一九七八年）の「カーライル」の項（六七―六八頁）参照。
- 27 高山、前掲書、二八三―八四頁。

最後に明治期に出版された『英雄崇拝論』の翻訳書および注釈文献を掲げておく。

〔翻訳書〕

石田羊一郎、大屋八十八郎共訳『英雄崇拜論』（丸善、一八九三年）

蘭山居士訳『ダンテと沙翁』（大阪 吉岡書店、一八九四年）

土井晚翠訳『英雄論』（春陽堂、一八九八年）

住谷天来訳『英雄崇拜論』（警醒者、一九〇〇年）

土井晚翠訳『改訂 英雄論』（岡崎屋書店、一九〇九年）

〔注釈文献〕

増田藤之助「カーライル 英雄及英雄崇拜」『日本英学新誌』二二号以下（英学新誌社、一八九三年）

増田藤之助「カーライル『英雄崇拜』」『英文評釈』（東京専門学校、無刊記）九〇―二〇八頁。

高橋五郎「カーライル英雄崇拜論」『英独詩文研鑽』I（増子屋書店、一八九七年）一―六頁。

本田増次郎「英雄崇拜論注釈」『英文新誌』一卷一―一〇号（英文新誌社、一九〇三年）

本田増次郎編『英雄崇拜論詳解』（内外出版協会、一九〇四年）

磯辺弥一郎「英雄及び崇拜」『中外英字新聞』一四卷九号（磯辺弥一郎、一九〇七年）二六四頁。